

俳人協会會報

1966年

3月

No. 15

完全と純粹と美とを願う輝かしき詩業

水原会長の芸術院入りを祝す

大野 林 火

水原秋桜子先生が、ついに芸術院会員に推挙されたことは、先生の榮譽ばかりでなく、俳壇にとって目出度いことである。すでに萩原井泉水氏が同会員でおられるが、俳句観に従い得ぬところが、そのため何かうつろな思いを抱いていたことが、これで満たされたからである。



先生の輝やかしい句業は、改めて私が述べるまでもなく、句集「葛飾」にはじまる十数の家集を一貫する、ひたすら完全なもの、純粹なもの、美しきものをねがうその作品群が雄弁に物語っている。殊に外光を取り入れ、風景句に斬新な明るい境地をひらき、俳句の近代化に一方向をもたらししたことは特筆すべきであり、その影響は大きい。また昭和初頭のホトトギスに黄金期をもたらした四S時代、さらに昭和六年、ホトトギスを離反、自ら馬酔木を主宰、新興俳句運動の口火を切ったが、のち、新興俳句の無季・口語化をきびしく排し、自ら唱導した連作俳句さえ俳句の独立性の危険を感じて否定、有季・定型を固守されたことなど想起すると、先生の歩みが現代俳句史に大きな足跡となつてゐることを知るのである。

「美しくて而も力に充ちた句を私は詠みつけてゆきたい」とは戦後、句集「霜林」を上梓されたときの言葉であるが、そのことは医業を廃され、年来好んでおられた各地の旅を重ねるにつれ、いよいよその作品に顕著である。

さきに芸術院賞を受けられ、今回芸術院会員になられたのは当然の榮譽といふべきであろう。

いま先生は齡七十余であられるが、翁の語は先生にふさわしくない。先生に接すればいままなお壯年者を感じる。主宰誌馬酔木は昨秋五百号に達し、同人誌友八千を擁しており、また俳人協会々長として名実ともに現俳壇の柱石であられることは言うまでもあるまい。

ますます御壮健に、われわれ後進のかがやかしい指針であられたい。

第五回 全国俳句大会

第五回全国俳句大会を左記の通り開催いたします。これは俳壇の主な結社が合同して、しかも全国的な規模で行なう俳句大会です。奮つてご応募願います。

応募 二句一組(雑詠・未発表のもの)。

原稿用紙使用(何組にても可)。会費一組につき二百円を同封して東京京浜谷郵便局私書函三一〇号、俳人協会「全国俳句大会」係あて三月三十一日(当日消印有効)までに送つて下さい。

選者 水原秋桜子・富安風生・山口誓子

・山口青邨・阿波野青畝・秋元不死男

・安住敦・福田蓼汀・長谷川かな女・平畑

・静塔・石田波郷・石塚友二・石川桂郎

・星野立子・角川源義・岸風三樓・皆吉爽

・雨・中村草田男・中村汀女・大野林火

・香西照雄・後藤夜半・米沢吾亦紅(順不同)

発表 五月二十九日(日)午後零時半より朝日新聞東京本社講堂で行ないます。

賞 入賞者には俳人協会全国俳句大会賞

・朝日新聞社賞、特選句には各選者の短冊または賞品

なお、当日伊藤整氏(芸術と生活者)・

富安風生氏(俳句雑感)の講演があります。

(入場無料。満員のときはお断り)

投句者には入選作品集を大会終了後一ヶ月以内に送ります。

主催 俳人協会
後援 朝日新聞社

第五回俳人協会賞

鷹羽狩行氏に決定

選考経過

第五回俳人協会賞選考会は昭和四十年十二月十八日聖富荘で行なわれた。出席者は水原秋桜子(会長)・秋元不死男・安住敦・石川桂郎・角川源義・岸風三樓・中村草田男・福田蓼汀・皆吉爽雨・大野林火の十名。石田波郷・石塚友二・香西照雄・平畑静塔は欠席。

選考会は議長大野林火司会のもとに行なわれ、選考に入るにさきだち、選考委員の作品は授賞対象からはずすべきか、否かにつき活発な意見が交わされたが、今回は措くということになった。協会員各位からの被推薦作品は数十にのぼったが



受賞者略歴

水流(高木てい子・信濃川(神保愷作)・命終(橋本多佳子)・枯山仏(萩原麦草)・対話(香西照雄)・火禪(井沢正江)・誕生(鷹羽狩行)・歴日抄(安住敦)

が第一選考の結果残り、つづいてこれらの一作々々につき意見を交換。

枯山仏(萩原麦草)
対話(香西照雄)
火禪(井沢正江)
誕生(鷹羽狩行)
歴日抄(安住敦)

が残った。ついで、さらに各作につき意見の交換が交わされ、最後、記名投票の結果、その将来性と新鮮さが高く評価され、殆んど満票で『誕生』(鷹羽狩行)に決定した。(大野 林火記)

(付記) 各選考委員の感想が「俳句」二月号に掲載されています。

受賞者略歴

本名高橋行雄。昭和五年十月五日、山形県鶴岡市に生まる。中大法学部卒。二十一年、新開千晩に俳句の手ほどきを受け「青潮」(佐野まもる選)に投句、のち同人となる。二十三年より山口誓子に師事して「天狼」に所属。二十九、秋元不死男の「氷海」に同人参加、現在編集に従う。三十三年、小谷美智子と結婚。三十五年、第十一回天狼賞受賞、「天狼」同人に推薦さる。三十九年、長女・弓を挙ぐ。四十年、処女句集「誕生」上梓。俳人協会会員。

現住所／川崎市北加瀬一〇八八第三住宅二二六号。勤務先／プレス工業株式会社。

受賞の言葉

鷹羽 狩行

五年前に第十一回天狼賞を得たとき、私はこれを激励賞と解し、受賞以後を頑張った。それまでの天狼賞は三十代、四十代であったが、私が二十代を代表して賞を得た。

こんどの俳人協会賞も、将来の激励の意味にとった。特に、三十代という恵まれた時期に受賞できたことは、何といっても嬉しい。

「誕生」は、昨年十月上梓(収録作品二十三年—三十九年)したので、年内はあまり人目に触れなかった。が、詮衡に間に合い賞を得たのは幸運であった。

授賞候補作品投票一覧表

氏名(結社名)	参考資料	票数
安住 敦(春燈)	句集「歴日抄」	27
鷹羽狩行(天狼・氷海)	「誕生」	20
井沢正江(雪解)	「火禪」	18
香西照雄(万緑)	「対話」	11
萩原麦草(壁)	「枯山仏」	9
橋本多佳子(天狼・七曜)	「命終」	7
神保愷作(春燈)	「信濃川」	5
高木てい子(水明)	「水流」	5
木村蕪城(笛)	「寒泉」	4
伊藤凍魚(雲母)	「水下魚」	4
藪本三牛子(天狼・運河)	「野峯」	4
富安風生(若葉)	「喜寿以後」	3
樋口喜代子(白壘・海程)	「花ばさみ」	3
長島千城(若葉)	「沖繩」	3
飯田竜太(雲母)	「麓の人」	3
右城暮石(天狼・運河)	作品	2
大野林火(浜)	句集「雪華」	2

(以下省略)

狩行氏のこと

上田 五千石

おそらく誓子俳句の生き辭引を自他ともゆるしていた氏の沽券を、私のデマカセ、思いつきの一句の例示が、いささかなりとも傷つけてしまったのかも知れなかった。

で、ことほどさように誓子一辺倒であった氏ではあったが、当時は壁につき当って天狼賞どころか、遠星集の巻頭もなかなかという苦惱の中で、ただひたすらに努めつづけていた時代で「山口誓子に入れあげて云々ああ片想い〜」と新人会の心なき数え唄に嘲されてもいたのである。

ところが、この改名と結婚という二つを転機に、まさに変身がなされたのである。

鷹羽狩行はもう高橋行雄でなくなってしまうた。

極寒や透きとほるまで斧を研ぐ(24年) 積雪を踏み来て燈火けがらはし(28年) とまで詠った酷烈な自己規制の枷をみずからゆるめつつ、「おとな」になりだしたのである。神経が太くなり出したのである。

万緑やわが詩の一字誤植して(29年) にみられるような誤字誤植、その他一切の誤りを認めないきびしき、潔癖さはフイアンセ小谷美智子さんからの愛の手紙すらも、校正の朱筆をもって真ッ赤にしてしまったというほどで、異常とさえいえだが、それも次第に寛容になって、いまでは氏の編集になる、われらの「氷

角力の世界に「兄弟子敗け」というのがある。胸を借りて稽古をつけてもらった先輩には、本場所一番の顔合せに、どうしたもか自分が十分に出きらず、ずるずると土俵を割ってしまうといった意味の言葉だ。

私にもそれがあって、鷹羽狩行には、いまだに「あんでし敗け」がぬぐいきれない。私の腕さといつてしまえばそれまでだが、氏の胸板の厚みが、私の成長を凌いで充実し続けているからである。

鷹羽狩行はペンネームである。

本名の高橋行雄(たかはしゆきぎ)をばらばらにして「たかは」と切り「しゆ」と切り、「きを」をくつつけるといふ、誓子先生一流の分解と再構成を経て成った。だから「狩行」は一寸読みにくい「しゆぎやう」と読むべきことを句集「誕生」の序に誓子先生が、ことわり書きされるわけである。

絵画的な名と或る詩人が評したが、絵巻物風でどこかものしく、私など氷

海新人会で、それこそ二つ飯盒のメシを喰ってきたものには、いっち親しめないもので、やはり「行雄さん」であり「行ちゃん」でなくては承服できなかったものである。

あれは、もう九年も前のことになる。

間近に結婚をひかえて、新居に荷物の大方を移したあと、がらんとした独身寮の一室に氏を訪ねたときだった。「こういう名にしたんだけど」と示されたのが「鷹羽狩行」で「舌を噛みそうな発音だね」というと「鷹の羽を拾ひて持てば風集ふ(誓子)に拠ってるんじゃないかな」と得意げに『激浪』の一句を氏はふりかざした。そこで「鷹と羽はそうだろうけど、狩行はどうなの」と切り返すとそこまではまだ用意がなかったようで即答がない。「梅干に狩の行、厨いきいと(誓子)はどうです」と私が『凍港』の一句をあげてみせると、「そうかなあ」をくりかえすばかりで、天井をむいたきり、いつかかな肯んじてくれなかつた妙な思い出がある。

海」誌も、ようやく誤植が目立つようにならなくなってしまっている。これも氏的人間的、作家的成長に比例してくるとするならば、われわれも笑って忍ばなくてはならないのだが、とまれ従来の知的構成的句風に、ふくらみと、うるおいが加わり、つやと、においが添うようになってきたのである。

雨滴休へし紅葉谷密月旅行 (33年)

スケートの濡れ刃携へ人妻よ (34年)

妻へ帰るまで木枯の四面楚歌 (34年)

新しき家はや虹の八ツ当り (34年)

新緑のアパート妻を玻璃囲ひ (34年)

妻と寝て銀漢の尾に父母います (34年)

これらの諸作に第十一回天狼賞が授けられたのは極めて当然の結果であった。

西東三鬼先生は「大願成就」「狩行万歳」とこれを讃えた。片想いの行ちゃんの苦闘の時代を思いやつての篤い言葉であった。

以後、今日まで、氏はひたすらに努めている。句境は拡がり深さをじりじりと加えつづけて見事な狩行独自の美的世界を樹立してしまつた。その句集「誕生」を俳壇は正しい評価を以て迎えて、ここに俳人協会賞を贈るといふ。

「勝って根性が生れる。その根性が次の勝利につながる。」根性と勝利の関係づけが大切だという氏の根性論はこれですます根づいていくだろう。私の「あんでし敗け」はまだまだ続くにちがいない。

安西冬衛氏の詩業

山口誓子

安西冬衛の詩業という業々しい話題ですが、ほんとは安西冬衛の詩についてと、いろいろのお話です。安西は関西の詩人で、今年の八月になくなられたので、今日は追善の意味もこめて安西の詩の話をしします。

先ず安西冬衛の略歴を紹介すると、明治三十一年三月に奈良の水門町という東大寺の寺領の町で生まれ、その後東京に行き、堺の中学にはいった。在学中は地理と作文が得意な課目であった。この地理と作文とが好きだったことが後の安西の詩業を決定した。

堺中学卒業後、大正八年に大連に渡り、昭和九年まで約十五年間中国に居住した。大連在任中に片一方の足を失い、不自由な身になった。大正十三年に詩人北川冬彦と一緒に「亜」という詩の雑誌を創刊した。堺へ戻ってからは「詩と詩論」に作品を次々発表した。私などもそ

れを貪り読んだものである。詩集は六冊他に随筆集「桜の実」がある。

それに大阪の家庭裁判所調停委員、大阪府社会教育委員を勤めたりしていた。詩人でそういうこともやっていた。余談だが、大阪の読売新聞で、身の上相談を約十年にわたって担当した。私は安西のその回答を愛読した。詩人は人生の悩みをいかに処理するかということ、詩人であるのに諸手続に詳しいということに興味をそそられたからである。

安西と私はかなり親しく交わった。私が伊勢に病を養っていた頃、訪ねてくれたのか。安西の詩の中に——その詩は安西の詩の中から一つを選べと云えばそれをとるといって程有名な詩であるが——「春」と題して、

てふてふが一匹韃靼海峡を渡って
行った

という詩がある。一行の詩で、昭和二年頃、大連で作られたと思われる。一方私の俳句に

郭公や韃靼の日の没るなべに
という少年時代に過した樺太を回想した俳句がある。昭和十五年の作で、安西の詩と大体同じ頃の作である。両方に「韃靼」の文字がある。これが二人を結びつけた。

先ず私の俳句の解説をみると、郭公は閑古鳥といわれる鳥で、その鳥がカッコロ、カッコロと鳴いている樺太の林野に折から韃靼の日が地上に没しようとしている。樺太の太陽を私は韃靼の日と見たのである。「没るなべに」というのは万葉の言葉で、当時私は万葉集に魅せられ、よく万葉の言葉を使った。日が没するにつれ、郭公がないという意味です。

伊勢で初めて安西と会ったとき、彼は「韃靼は辺境精神である、お互いに辺境精神だね」と言ってお互いの肩を叩き、私達

は忽ち近づきになった。
ところで安西の「てふてふ」の詩の解説は色々な人がしているが、村野四郎氏は、「エキゾチックな地理的幻想」と評した。中学時代の地理と作文が結びついたのである。北川冬彦氏は「彼はフトしたはずみに、蝶々が一匹韃靼海峡を渡って行ったというイメージを思い浮べた。

韃靼海峡が彼の脳髓を刺戟したのは、彼がその当時住んでいた大連という地理的

位置が然らしめたものと考えられる」と評し、冬彦も大連の地理的位置を強調している。これも地理と作文の結集である。

これは別の言葉で言えば、風土と人間の関係である。芭蕉の言葉で言えば「奥の細道」の象瀉のくだりに「地勢魂をなやます」と書いてある、あれです。それも風土と人間の関係でそれが今に至るまで俳句の伝統の中にある。また、鮎川信夫氏はこの詩を分析して「てふてふ」という極微的なもの、韃靼海峡と云う極大的なもの、この両者が対比されている。詩的想像力の所産である」と言っている。それから安西の死後、東京新聞の八月二十七日号匿名批評欄には、この詩について「ここに示された極大と極小を同時に併存させる詩法」と書いてあったが、鮎川氏と同じ考え方である。

では安西自身はどんな解説をしているか。安西は尊敬するアリストレスの説に従って歴史家と詩人とをはっきり区別している。即ち、歴史家は実際に起ったことを書く。これに反して詩人は起り得ることを書くのであるとしている。また安西は詩は予前想像である。詩人は将来起り得ることを予知して書く、詩とはそういうものだと言っている。「てふてふ」の詩は予前想像、起り得るものとして書いたのである。

安西は更に細かい分析をして、あの蝶は自分の家の紋は揚羽蝶で、これがひら

めいた。韃靼については、安西の生まれ
た明治三十一年三月九日は、東大寺の二
月堂のお水とりの行事の最中で、この行
事の最後の「だったん」の修法が行なわれ
ていた最中であつた。その「だったん」
がひらめいた。韃靼海峡と蝶とはかりそ
めではない。頭に残っていたものが、フ
ツと結合したのだと言っている。

更に「てふてふ」は平仮名の旧仮名使
いで書いてあるし、「韃靼」は漢字で書
いてある。この平仮名の「てふてふ」と
漢字の「韃靼」の持っているイメージと
の激しい対照が面白いのと、てふてふと
タタール（中国語）と重音の言葉の恍惚
たる「コレスボンデンス」、そこに春の
到来が信じられたのだ、と言っている。
安西は「コレスボンデンス」という言葉
が好きでよく用いているが、安西はこれ
を「共鳴」と解していた。

更に安西は後年独立展で三岸好太郎の
「海洋を渡る蝶」を見た時にこう言っ
ている。「海洋は博愛である、蝶はこの世
のものでない鱗翅類である」と分析して
いる。安西の「蝶と韃靼海峡」にはこの
ような色々なイメージが重なり合ってい
た。

この詩を頭において安西の詩の詩法を
考えてみる。安西は言葉を大切に、
「詩は言葉の城である」、「言葉と言葉の
コレスボンデンスの上の組立である」、
と言ひ——言葉のかわりにオブジェ（も
の）とも言っているが——また「言葉と

言葉は、目にみえない紐、透明な帯でつ
ながっている」とも言っている。最後の
詩集「座せる闘牛士」では、「あり得べ
からざるものとの結合、意外外の
出会い」と言っている。一口にいうと
安西の詩は、言葉と言葉の共鳴によつて
出来ている。しかも言葉と言葉の間には
目にみえないつながりがある。ものとも
のとの結合するというけれども、それは
思いがけない結合であると言うのであ
る。

安西のこの詩の作り方と俳句の作り方
とのつながりはどうであろうか。私は同
じであると思う。俳句は直感の詩であ
る。作者が自然と出会い、思わずアアと
叫ぶ。その叫びによつて出来る詩である。
芭蕉が「感ずるもの動くやいなや」と言
ったのもこれで、「気先を以て無分別に
作るべし、心頭に落す可からず」、即ち
一気に、あれこれ考えないで作るべしと
言ったのもこれである。俳句は昔から直
感の詩であつて、そこにうたわれるもの
どもの、言葉と言葉の間には関係があ
る。関係に於いてとらえられている。芭
蕉の言葉で言えば「発句はとりあわせ」
である。ものとの関係づけ、配合
である。安西が「ものとのコレス
ボンデンス」と言ったのは、とりもなお
さず「とりあわせ」である。
また安西が「目に見えない紐」と言っ
たのも俳句にある。俳句では十七音で関
係まではうたえないので、ものとのだ

けが投げ出され、関係は見えない。目に
見えないので私はこれを「抽象構成」を
持っているという。この説明に京都の石
庭の話をすればよくわかる。たとえ芭
安寺の石庭の場合、作庭家は石を配置し
た。配置とは石と石との関係をつけたこ
とである。作庭家が関係づけた石と石と
の関係は目に見えない。それで私は菴安
寺の抽象構成であると云う。あの石庭を
見てそう思うのは私だけではなく、川端
康成の「美しさと哀しみ」という小説
で、女画家とその弟子の会話があつて弟
子が「石組みはみんな抽象じゃありませんか」と言ったり、「わたしはあの枯山
水の岩や石を見て、昔の日本人の抽象を
見てしまふんです」と言っている。

これは川端氏が作品の人物を通して
言っているの、川端氏も抽象と見てい
るのである。安西の詩の方法は、言葉と
言葉が目に見えない透明な紐でつながつ
ていると言つたが、これがわれわれの俳
句の抽象構成である。われわれの俳句の
方法と同じである。安西はものどもの、
言葉と言葉の共鳴と言つたが、俳句にも
そういう共鳴はあるのであつて、俳句で
ものどものとが共鳴する場合にその一方
のものは季節のものである。季物であ
る。ものとして考えれば季物、言葉とし
て考えれば季語である。季語を伝承的な
ものとし、現代に通用しないものである
から止めてしまふなどという荒々しい議
論もあるが、季語は俳句の世界では極め

て大切である。

季語は季節の絶大無限のエネルギーを
担っている言葉である。絶大な無限のエ
ネルギーをもつた季語と他の言葉とぶつ
かり合った時に火花を散らす、俳句とは
そういう詩である。

それにつけて少し能の話をしたい。

最近、金剛巖の「松風」を見た。御承
知の通り松風・村雨と行平の恋物語であ
るが、シテの松風とワキの村雨姉妹は物
語の始めでは同じ面をかぶり、同じ衣を
着て現れるので、見わけがつかない。能
が進んで来て、シテの松風が行平の形
見の立烏帽子をかぶり、狩衣をまとう
と、昔の恋の力がよみがえつてきて、情
熱的な激しい舞をまう。とてもいい舞で
あるが、季語も同じようなもので、絶大
無限のエネルギーを授つて、それによつ
て激しい舞をまうのが季語である。
私は松風を見て、松風は即ち季語である
と思つたのである。

最後に付け加えたいことは安西が自ら
の詩を語る時に、あり得べからざる結合
意外の出会いと言つたが、これは詩の
世界では大切であるが、俳句のとりあわ
せは、不即不離がよい。離れすぎると前
衛俳句がやっているような、読者の理解
を絶するような結合になる恐れがある。
われわれはあくまで、とりあわせ、配合
を尊重するけれど、即かず離れずの結合
を忘れないようにしたい。

（文責在記者）

権現様

春祈禱

阿部思水

(浜、北鈴)

小正月を境に権現様が戸口から戸口、部落から部落へと笛の音を流しはじめる。

このころ、旧正でなければ大量の雪がなかなか見られなくなった。一度にどっと来た大雪が、そのまま地上に根を下してはじめて根雪となるのである。根雪となると軒並みに氷柱が垂れさがり、野山では地吹雪が荒れ放題となる。雪が降っては固まり降っては飛び散り、生活がいつの間にかやら雪に嵌り込んでしまう。

その頃、農家では寒豆腐を組み、寒餅を組み、寒大根を吊しはじめる。

やがて、軒氷柱が垢じみはじめ、屋根雪も地上へすべりがちになると、権現様が戸口に佇つ。

黒い獅子頭を頭上高く掲げて、烈しく振り廻しながら、一戸一戸ていねいに払ってゆくのである。

白の水干に水色のはかま、そして烏帽子姿の神楽組が、里から里へ、めぐるのに会うと、雪に覆われた山野の日ざしが暖かさを増し、冬が急に動き出しそうな気配をはつきり身を感じる。風紋に曝されている雪も間もなく残骸をとどめることになろう。

神楽組、そこには、ふだん見慣れた顔々ばかりであるが、それでも春のいのちを戸毎に配る厳肅さは、その真顔にありありと現われている。黒光りの獅子頭、大きな眼玉、そして打鳴らす歯音の響き、魔を払い、幸をもたらすに十分な力感と貫録に

満ちている。

権現囃子と権現様の歯打ちが交錯するなかを、子供たちが何かを見届けでもするように、ぞろぞろ後に蹤いていく。子供の群れをいくたびも振替えながら、権現様は北国の家々に春の神霊を住ませていく。権現様が家を訪れることによって、その家にはじめて春がもたらされ、その年の幸せがはじめて予約される。

東北は神事芸能の宝庫といわれている。鮫の神楽(八戸市)もその一つである。山伏神楽ではあるが、いわゆる南部神楽の系列にはいるのである。式舞女舞、番楽舞、神舞、荒舞など三十以上の舞が伝承されている。

夜になって、神楽組がその日の泊りの民家を訪れるのである。ここで、神楽組が酒肴をもつて大きな歓待を享けることになる。そして民家の一間を舞台とし、夜を徹してさまざまな舞を舞い、集ってくる人々を心ゆくまで楽しませ堪能させてくれる。番楽舞は特に子供に親しまれ、後の語り草にまでなっているほどである。

深夜から夜明けまで舞うのは、あくまで神事であるからで

あり、神の恵みにいつまでもあやかりたいという、主人の熱望でもある。それだけに多くの幸を約束される結果になることにもなるのであろう。

鮫町はむかしから漁業でくらしを立てている。漁業は今でも運不運が大きくつきまとう企業とされている。企業が大きくなればなるほど不安定な面もまた増大する。そのためでもあろうか、今でもその泊り家を継ぎ目として権現様が路地から路地へとめぐりゆくのである。ラジオやテレビの時代になって、どんな山奥でもそれさえあれば、娯楽に飢えることのない現代であ



鶏舞(式舞) 闘鶏のしぐさをし、勝つことが富を招くという。

る。権現囃子が冬籠りから解放す唯一の音色であった時代は去ったとしても、旧正のある限り、郷愁を湧かす音色であることには、これからもあまり変りはあるまい。寒が明けても、立春になっても、権現様の笛の音が流れないと、みちのくの春は閉ざれたままなのである。

権現囃子が巷から消えると、氷柱が融け、屋根雪がずり落ちて、雪汁があわただしく道を流れはじめる。すると待ちあぐんでいたように「えんぶり」がやって来る。権現様は、いわば「えんぶり」の前振れでもあったのである。



番楽舞。曾我兄弟討入の場。語り物だけで舞い、歌舞伎調のせりふも言う。

会員の声

武良山生

「会員の声」欄を見てみると、その一として協会と会員の関係を深めるための方策、その二として協会賞の選賞に関するものが多いように見受けられる。

その一としては地方支部の設置とか地方句会の開催が挙げられている。皆適策と思われるが、それは地方で先ず自主的にやってみたらどうかだろうか。長野県には俳人協会（俳人協会とは全く無関係で網羅主義）があつて毎年合同句集を発行したり、全県又は地方別句会なども開いて全員の心の交流を図っているが、中心人物となる方の努力は並大抵のものではなく、このような組織は適当な人物の有無がその永続性の鍵である点から考えて、先ず地方的に自主的にやってみたらどうかと提案する。

次に、その二の協会賞選賞に

ついては、今の制度はそれなりに存在価値をもつものとして認めてよいが、その外に次のような制度を採用して見たらどうかと提案する。

それは隔年毎に合同句集（三冊位は引受けてもよい）が発行されるそうだから、この句集の中から相互選で、その年間の業績を見て優秀作家を選んで見たらどうかということである。社内閉塞している現俳壇の現況から弊害も予想されようし、点数の如何が価値判断の基準になり得るかという疑問も残るだろうが、その結果については「会員の声」の欄で全会員が自由に、きびしく批判しあえば、それらの弊害はしだいに除去で

きるものと思われる。俳壇の閉塞性を打ち破って発展の方向へ向うためにも、作品を通じて会員の俳句精神の交流を図るための必要悪と考えるならばこの提案も無意味ではないと思うが、会員皆さんの声をお聞きしたい。また協会のご意見も。

〈寄贈著作〉

俳句シリーズ・人と作品 14

「文人の俳句」村山古郷著

発行所 桜楓社

（東京都千代田区西神田二ノ二九）

句集「形代」西山 誠著

発行所 春燈社

（東京都目黒区柿ノ木坂三ノ四ノ一四）

〈寄贈誌〉

鹿火屋、みちのく、獺祭、蘇鉄、面、山茶花、運河、地帯

若楓、祖谷、早苗、かまつか

新樹林、黒姫、俳句文学、夏

炳、新曆

昭和四十一年度総会予告

日時 三月二十六日（土）午後一時三〇分～六時

場所 東京都千代田区大手町二ノ一

通信綜合博物館地階ホール（地下鉄大手町下車、サンケイホール向い）

議 題

1、昭和四十年一般経過報告・事業報告・決算報告

について

2、昭和四十一年度予算案・事業計画について

3、規約改正について

総会のと、俳人協会賞授賞式を行ないつづいて懇親会を致します。

懇親会費 五百円

俳人協会

お知らせ

協会事務所移転

今回左記に協会事務所を移転いたしました。また毎日誰かが詰めているところまでにはいきませんが、おいおい整備していきたくと思っています。郵便物は、書留の場合は前通り渋谷局私書函三二二号が便利です。

渋谷区千駄谷四ノ一〇日本デザインスクール会館内 俳人協会

国電千駄谷駅下車代々木駅に向かって数百米、藤田組の角を左折、すぐ右側です。